



三遊亭竜楽 落語家

さんゆうてい・りゅうらく 1982年中央大学法学部卒。85年三遊亭円楽に入門、93年真打昇進。日本放送作家協会会員。日本脚本家連盟所属。中央大学では、学員講師として各地で講演を行う。



飯田朝子 助教授

いいだ・あさこ 99年博士（文学）取得。専門は言語学。日英語の数え方を中心に研究中。著書に『数え方の辞典』、『数え方でみかく日本語』など。商学部では英語の授業を担当。

落語の数え方 お教えします

竜楽 「竜楽のおじやまします」今回初めて私より若いゲストをお迎えしました。

飯田 そうですか。よろしくお願ひします。

竜楽 早速ですが、先生のこの『数え方の辞典』を読ませていただきました。どんな意図でつくられたのですか。

飯田 私が大学院生だった頃、日本語の数え方って難しいけど、面白いなと気が付いたんです。そしたら、外国人の留学生から「数え方がどうも難しくて」ということを聞いて、そんなの簡単なのについて思ったんです。例えば、物は1個だし、細長ければ1本だよみたいなんです。「それなら、なぜ柔道の決まり技は一本なんですか」と聞かれて、細長いからとは説明できなかったんです。そんなきっかけで、調べ始めたら、はまってしまったんです。

竜楽 ある程度日本語を話せるようになった外国人人には、会話を充実させるうえで非常に役立ちますね。
飯田 特に中国語を話される方は、似ていてちよつと違うような表

現がたくさんあるんです。例えば本だと1冊、2冊と数えますよね。だけど中国語だと1本、2本。いわゆる「book」という「本」の字を書いて1本、2本なんです。そうすると彼らは1冊なのか1本なのか混乱してしまってます。

竜楽 なるほど。昔の巻物のような数え方でしょうかね？ あまり関係ないか。

飯田 でも多少関係しているとは思いますが。巻物は1本、2本と言いますから。昔の単位とか数え方と言えば、落語にもたくさん出てきますよね。

落語の中の数え方

竜楽 そうですね、落語には結構あります。私も『数え方の辞典』を読んでいて、ちゃんと載っていたなと思ったんですが、「井戸の茶碗」という話の中で編笠を数えるとき、「百両のかたに編笠一蓋（イツカイ、またはイチガイ）」というのが出てくるんです。百両借りののに「かた」として編笠一つでも渡すのが礼儀だ。という話ですが。

飯田 そうなんですか。

竜楽 そういうあまり聞いたことのない数え方って、結構落語の中にあるじゃないですか。本には載ってなくても、口伝えだから残っているようなものです。そういうものが『数え方の辞典』が出たことで、あまねく行き渡ってくれると非常に落語がやりやすいんですね。(笑)

飯田 そうですよ。落語も数え方ってすごく多いですよ。実は私、高校の頃落語をやっていたんです。

竜楽 そうなんですか。

飯田 はい。私は「七福神」という話が好きなんですけど、落ちの部分の数え方になっていきますよね、『一幅で』で。

竜楽 かなり古い噺ですね。

飯田 そうですか。「七福神」の絵に神様が6人出てくるんですが、1人足りないということになる話でした。

竜楽 一幅(一福)の絵であるというので。という落ちですね。

縁起担ぎの人が呉服屋さんの店先で

「あなたは福々しくて恵比寿様のようで」だったかな。「ちよいどのぞかれた女将さんがまるで弁天様ですね。こちらは七福神おそろいでおめでどうぞございます」と言う。「私が恵比寿で家内が弁天、二福じゃないか」「ご商売が呉服(ごふく)「五福」でございます」という、そういう落ちもそうですよね。それにしても、これだけたくさんさんの数え方を探すっていうのは大変な作業ですよ。

飯田 結構地道な作業でした。

竜楽 分からないときはどうするんですか。

飯田 電子的にいろいろ出てきた文章を分析していき、それを蓄積していくんです。一応それで1500種類ぐらいのもの数え方をリストにしたのですが、それだとすべてのものを数え切れないので、最後は国語辞書を1ページずつめくりながら、これは数えられるかな、数えるとしたら何と数えるかなと、一つひとつ拾い出して、なんと言うか、もう手編みの辞書という感じでした。

竜楽 そうですか。また落語の話

に戻りますが、落語では、ものを数える時の単位というのめたくさんありますね。

例えば一俵という単位ですが、これは四斗という量の単位を一俵とし、四斗俵を一俵と言います。でも落語の場合、あまり四(し)という言葉を入れたがらないから五斗俵を何俵というように表現したのではないかと思うんです。

飯田 縁起が悪いから？

竜楽 あと言いくらいということもあるでしょう、四(し)斗俵だと江戸の話し方だと四百文(よんひゃくもん)じゃなくて(ししやくもん)ですからね。だから「井戸の茶碗」という話でも、三百文(さんびやくもん)で買ったものを四百(ししやくもん)で売るといふのを二百文と三百文に置き換えているんです。

飯田 なるほど。金額を下げてても四(「し)を出さないように。

竜楽 そうだと思います。

飯田 面白いですね。私は落語をする時に、お金の単位が苦手で、高校時代にやらせていただいた「火焔太鼓」という落語で、甚兵衛さんが

「火焔太鼓」を二束三文で買ってきて、それを三百両で売り、お金を奥さんの前で出す場面、一体その三百

両というのが当時の貨幣価値でどれぐらいなのか、しかもその塊というのがどれぐらいの大きさで、どのくらい重さか、袂からどうやって出していくか、そこら辺がどうやっていいの全然わからなくて……。50両ずつ包みになっているのを知って、おまんじゅうぐらいの大きさだと思って軽く出したら、年配の方からもっと重たく出したほうがいいとか言われて、難しいなと思いました。

竜楽 確かにね、両という単位が……。落語では、最初に一両7万円から10万円ぐらいだということを大まかに言っていますね。私のイメージとしては、7万、10万よりもっと高いものだと思うんですが。

飯田 落語をやっているとそういうふうな千両箱の7千万円のお話も出てくれば「時蕎麦」みたいに一文、二文をくすねるような話もたくさんあるから、だいたい貨幣価値が人によって違っていたんだな思いました。

竜楽 そうですよ。文が一両四千文とされてますけれど。結構難しいですね。

飯田 「怪気の火の玉」でしたか、おめかけさんと本宅の奥さんがお互いに柱にわら人形を打っていくという、結構怖い話ですけど、その5寸くぎから6寸、7寸というように、くぎが長くなっていくじゃないですか。それを演技するときに、やっぱり打ち込むのに長ければ長いほど回数をたかなければいけないと思っ

ていました。

竜楽 細かい。(笑)。
飯田 1寸長くなったら1回増やしてとか。

竜楽 もの凄い演技ですよ、我々はもう叩いたっていうことにしちゃうから。

飯田 そうなんですか。私たちの場合は、研究会だったので研究してしまっただけです。(笑)

竜楽 いや、それはすごいですよ。そこまで細かく考えるというのは。

飯田 私は一度、あまりに演技が白熱してしまって、座布団をつかんでしまったんです、すごく怒られま

した。座布団は絶対使っちゃ駄目だと言われて。おかしいですね。

竜楽 面白い高校ですね。

飯田 女子校だったんですよ。

竜楽 へえ。その先生に落語が好きなのがいたんですか。

飯田 いえ、そういうわけではなくて、みんな割とお笑いを追究する仲間が多かったです。そんなでしたから、今の私の授業の時などでも話しに「切り」を付けちゃうんですよ。何か落ちをつけて面白いことを言わなきゃいけないと、本能がうずいてしまうんです。

竜楽 なるほど。先生の落語の持ちねたは、いくつぐらいですか

飯田 六つか七つぐらいかな。

竜楽 でも「火焰太鼓」っていうのは、なかなかの大作ですよ。私なんかこの世界にはいるまで全然人前で話をするがありませんでした。そういう人の方が意外とプロになるんですよ。

準備・稽古、そしてテンポ

飯田 師匠は、司法試験を目指していた時期もあったと聞きましたが、

なぜいきなり落語の世界へ飛び込めたのですか。懸け橋が何かあったんですか。

竜楽 基本的に法律が好きじゃなかったんです。(笑) 流れて勉強しただけで。落語はもともと好きでしたけど、ある種の衆人恐怖症ですね、人前で話すということができなかったんですよ。

飯田 でもそれが一転して漸家になるには何かきっかけがあったんですか。

竜楽 やっぱうちの師匠の話がよかったからだと思います。あとはこのままいつたらどうにもならなくなると思って、それならやりたいことをやろうと思ってこの仕事に入りました。好きな話もありましたし、それをやってみたかったですね。

飯田 そうなんですか。

竜楽 ただ好きな話は大体だめです。

飯田 えっ！どうしてですか。

竜楽 好きな話というのは、何かこう……惚れているけれども、やっている自分が楽しい、いい気持ちになっちゃってしまっていて、聞き手は別に

いい気持ちじゃないということが結構あるんですよ。

飯田 そうですか。(笑)

竜楽 もうそれをやっているだけで気持ちいいというか、その話に対しては甘くなるんです。嫌な話とか嫌いな話は冷静に対処するから、結構ちゃんとできるようです。嫌々覚えた話のほうが「合ってるよ」と言われます。大体こういう仕事は全般そうですね。自分がよかつたと思うときは、危険なんですよ。

飯田 それは自己満足という意味ですか。

竜楽 そうですね。やっている最中に気持ちよくなってしまうと冷静じゃなくなるんですかね。

飯田 ありますね。スピーカーズハイというのが。授業でもあります。

竜楽 やっぱあります。

飯田 ええ。学生がちよつと遠のいてしまうようなときがあるんですよ。

竜楽 やはり自分の気持ちを歌い上げちゃうみたい。

飯田 はい、私の場合は授業を準備しすぎるとなってしまうんです。私は割と教材の仕込みに時間をかけ



るタイプで、例えば1コマの授業に5時間ぐらい準備したりするじゃないですか。そうするともう完ぺき5分後にこの話をして、次にこの問題をやらせて答え合わせをすればちよつと90分だとか思つて行くじゃ

ないですか。そうするとつい余計な話をしたり、学生のリアクションをおおたりして、学生自身は割と冷めた目で見てゐるのに、先生1人ではしゃいで実際に教えたかつたことの半分もできないことがあるんです。逆に準備しないのはよくないのですが、

「今日はちよつと足りないかな。不安だな。でも何とか度胸で頑張るぞ」となると集中して、それを学生に少し頼つたかたちで授業ができるので、終わつてみたら今日はすごく面白かつたとなる場合があるんです。落語でも、こんなことはありませんか。

竜楽 この間、ある場所で開催をやつたときのことですが、普段だつたら必ず事前に以前の会で他の人がやつた演目を聞くんです。でもそのとき

に限つて聞かなかつたんです。現地に入つてから確認したら、今日自分がやろうと思つていた話ばかり並んでいるんです。それで困つたと思つて、始まるまで1時間半ぐらい余裕があつたので、別の話を必死に稽古してやつたんです。そうしたらすごく評判がよかつたんです。続けて翌日は近くの港町での会だつたので、開放的な所だから何をやつても大丈夫と言われて乗り込んだんです。それでやはりどこかに油断があつたんでしょうね、受けません。弱りました。演目は「天災」という話だつたんです。ちよつと乱暴者の話だね。これが「タイガー&ドラゴン」の影響でしょうか、お客さんの中に洒落にならない人たちが混じていたようなんです。(笑)だから次の話では「枕」を20分ちかくもやつて受けたんですが、今度は逆に長くやつたがためにおながが減つてきて笑わなかつたという始末です。どうせなら短くポンポンとやればよかつたんですね。

飯田 そんなこともあるんですね。何分ぐらゐの話が一番観客もやるほうも集中できるんですかね。

竜楽 それは雰囲気ですね。

飯田 雰囲気。

竜楽 大笑いをずっと続けていると、やつぱり短いほうがいいですよ。疲れちゃいますからね。ところで先生は、落研にいたのが授業をするのに結構、役に立っているでしょう。

飯田 すごく役に立っています。

何と言つても舞台度胸が違いますよ。何かもう人前に立つたときに、自分の中でスイッチが入る感じがするんです。恥ずかしがつたり、上がつてゐるといふのがないんです。ほかの先生たちが緊張して話せなくなつてしまふのを見ると、私の中にはスイッチがあつて、それは落語で鍛えたお陰かなと思います。学生たちも「先生は、アナウンサー研究会にでもいたんですね」とよく言われるんです。「落語をやつていたんだよ」。全員で「うそーっ」と言つてびっくりするんです。実は、私は英語の教員なんです。

竜楽 えっ、そうなんですか。

飯田 はい。中大では商学部で一般教養の英語の授業をやつていまし



ちよつとふに落ちない感じでした。

竜案 やはり今話を伺っていて、間とかテンポを感じますものね。

飯田 そうですか。自分では全然わからないんですけど。学生の顔色を見ながら「あつ、面白い。乗ってきてるな」とか、「あつ、ちよつと疲れてるな。これはちよつと小話でも挟むか」とか、「ここは一気に答え合わせをやっちゃうぞ」みたいな、そういうつかみ方は落語で学んだと思いますね。

竜案 難しい話などを理解してもらわなければならないから、そのためには笑いも大事ですよ。

飯田 学生は、将来人前で話す仕事に就いたり、会議とかで発言する機会が多いと思うので、度胸だけでなく、説得する力とか思考回路も身に付くように指導しています。

竜案 特に我々の仕事は、相手からの答えがなかったら成り立たない仕事ですものね。

飯田 そうですね。だから大学の教員になって、話すことがいかに大切かということをごく実感しました。今の大学生はいろいろな忙しいし、

気が散ることが多いですから。90分座らせておくというのは結構大変なんですよね。だから90分は無理だとしても、せいぜい70分ぐらいは起きて話が聞けるような、そういう仕掛けを授業の中にたくさんつくっておきたいと考えているんです。

竜案 やはり飽きやすくなっていますよね、昔以上に。

飯田 はい。特に1年生を私は教える機会が多いのですが、今まで高校では45分の授業を受けていたから、それがいきなり倍になるわけです。そうすると、休み時間が欲しかったり、携帯が気になったりしますが、半年ぐらいうると大学の授業の流れや長さに体がついてくるんです。ただ授業を飽きさせないという意味では私が中大で教えているユニークな授業の一つとして、体育連盟の学生だけのクラスの例があるんです。

竜案 それは大学の方針として分けているんですか。

飯田 商学部はそうやっているんですけど、47名の学生が全員体育連盟所属なんです。彼らは、高校のこ

ろから長時間に渡る勉強の訓練を積んでいないので、飽きるのが早いです。例えば私に90分間マラソンをしろといったら、とてもできないのと同じで、彼らは90分間机に座って勉強するのが苦痛に感じるんです。

そこで、今スポーツ英語というのをやっているんです。スポーツマンで国際的に活躍するためには外国語が絶対必要じゃないですか。だからいろいろなスポーツで使う英会話の表現とか、先週はインタビュアの受け方というのをやって、もしあなたがアメリカの大会で優勝したら、インタビュはどうやって受けますか。

“Congratulations.”と言われたら、なんと答えますかなど、私がインタビュアーで「優勝おめでとうございます」とやっています。もし彼らが本当にそういう場面で優勝したら、さすが中大出身の選手だというように言わせてみたいんです。今の時代スポーツ選手にもプレゼン力といいますが、自分を表現する力をどんどんつけてもらいたいと考えています。

竜案 面白いですね。やはりそういう興味があるところから入ってい

かないとね。

飯田 そうですね。彼らは自分に関係していることだとすぐよくやるし、反復練習はものすごくいんです。例えば何度も同じ単語を言わせたりとか、書かせたりとか、普通の学生は嫌になってしまいうことも何ともないんです。

竜楽 それは初耳だな。くりかえしに強いんだ。

飯田 強いですね。ただやっていく種類によって覚える力が、異なっていたりとかもあります。もちろん例外はたくさんありますが、ところで、師匠はお弟子さんがたくさんいらっしやるんですか。

竜楽 いやいや、いません。ただ後輩は入ってきますから、私が教えることは多いです。



飯田 そういうときに「今の若い人たちは日本語ができない」なんて実感することありませんか。

竜楽 インターネットで入門した人もいますから。

飯田 ネット入門なんですか。

竜楽 そうですね。だから言葉の響きみたいなものを感じる感性が弱くなっている気がします。何を言っても全部「すいません」しか言わない。「申し訳ありません」とか、「おわび申し上げます」でも何でもいいのですが、言葉のバリエーションを増やして欲しいものです。国語を武器として仕事をする稼業でありながら、国語力の低下を感じます。我々が一番初めに言われたのは、日常的に同じ言葉を重ねないように話せば、使える言葉が増えるということでした。意識的に絶対同じ言葉を使わない。「同じ」と言ったら「同様」と言い、「重複」と言ったら「重ねる」と言う。小さなことですけれども、それを心掛けていると自然に重ならなくなるから、話が退屈でなくなるんじゃないかね。

飯田 それは言葉を増やすという

意味で。

竜楽 そうですね。例えばバツと何か言ったあとに、言葉が出てこないことがあるんですが、そのときに違う表現をするパターンをいくつか持っていたほうがいいということなんでしょうね。落語の場合、2人の会話が多いじゃないですか。だから「なんか夕べやり過ぎちゃったよ」「二日酔いか「頭がいてえや」。「どの店、行ったんだ」「横丁の角だよ」。「何時まで」「午前様」。「のれんを下ろすまでかい」「看板まで粘っちゃまった」となるんです。必ず違う言い方で返すんです。太鼓持ちのテクニクもそうらしいけれどね。

飯田 お客さんはだんだん気持ちよくなりますものね。そういうふうにはリアクションしてもらえば。

竜楽 ええ。ところが今の人は、それができないんです。この前、前座の会があつて打ち上げに行ったら、テーブルは二つあるんですが、一つのテーブルは前座だけで、もう一つのテーブルはお客さんだけなんです。

飯田 意外ですね。

竜楽 お客さんは前座分払って

るんです。だから、お客さんの間に

入って話するのは当たり前だと言ってさんざん怒りました。人との会話は自分の武器になるわけですし、相手を飽きさせないように言葉を使っていれば、高座でも飽きさせないようなセリフになっていくわけです。相手が1人しかいない座すら持たせられなかったら、高座で何百人の座はとも持ちませんからね。それに、どんな人とも話ができれば、どんな役柄もできるようになると思うんですが……。自分たちと同世代だったら盛り上がってしゃべるんですが。

飯田 目上の人と話せないということですね。

竜楽 そうですね。

きちんとした日本語を

飯田 同じようなことですが、学生たちは敬語を使えないんです。彼らの感覚では敬語という「語」、落語も「語」なんです。この「語」のせいで、一つの外国語みたいな敬語という言語があつて、それをマスターしないと就職で困るらしいぐ

らしいの感覚ではいるんです。敬語って一応外国語というほど知らないわけじゃない。テレビで流れていたら理解できる。だけど自分が使うとなると使えず、授業中も「です」「ます」を付けるのが精一杯の学生も結構います。あとは下手にちよつと聞きかじった知識があると、例えば「先生、この本、存じ上げていらつしやいますか」とか言ってくるんです。確かに「存じ上げる」というのは「知る」の丁寧な言い方だけど、目上を使う表現じゃないですね。でもそれを、ああ「存じ上げる」って、「ご存じですか」の意味で使っているのかな、というように過剰に解釈して「あつ、知ってるよ」と答えてはいけなあと思ふのです。私は授業では学生たちに必ず全部敬語で話しているんです。個人的にちよつと親しくなれば「です」「ます」とか「何々ね」とか言ったりはしますが、授業で教壇に立っている限りは必ず敬語を使うようにしています。それは私なりに意図があって、学生たちに「高校時代に敬語って勉強した？」と聞くと、「いや、全然しなかった」と言います。敬語



を使う機会という家庭ではないし、バイト先でもあるかどうかわからない。唯一敬語を使う対象であったはずの学校の先生が、ひどい言葉遣いをしていたという学生が多いんです。例えば男の先生だと熱血漢なのはいいのですが「ばかやろう。おまえ、そんな問題も解けなくて大学に入るかっつんだよ」みたいな……。
竜楽 それ、ダチですよ、もう完全に。(笑)
飯田 そういうことを授業中に先生が教壇に立つておっしゃるそうなんです。それを聞いて大学に入学、いきなり私が敬語で「皆さん、おわかりですか」などと言うと、最初は違和感があるようです。だけど大学というのは、社会と高校との懸け橋として、これから社会に入る人たちに模範を示す場であつてほしいと感

じているんです。学生には私に話しかけるときには、きちんとした言葉遣いで話さないと言いますし、もし敬語を間違えたらなら、もううるさいおばさんと思われてもいいから、逐一直すようにしているんです。だつて英語の発音を間違えたら直しますよね。それと同じで「あなたの敬語、ここがおかしかった。存じ上げる」とは言いませんよ」というようにです。余計な手間かもしれませんが、いちいち直すんです。
竜楽 大事なことですな。
飯田 そうすると、半分の学生は私の意図が分かります。でもあとの半分は「なんだよ。関係ねえじゃん」ということになってしまうので、その辺はもう学生の自覚に任せます。時間がたつて、あのととき先生が言っていた敬語の使い方は大事だったと実感してくればいいと思つていきます。やはり教壇に立つたら、教師は模範を示す気持ちが必要なんだと感じているんです。敬語が使えない、日本語が乱れている、今の若いやつはしょうがないと言われている、何が悪いのか全然わからないんです。

「英語の発音、悪いね。それ、文法おかしいよ」と言われても、何がおかしい、どこが間違っているか教えてもらえない限り、一生直らないんです。だから中大生には何語であっても言葉をしっかりと使つてほしいと思つています。

竜楽 最近では普通に話をしていて、丁寧な表現というのもし少ないですね。
飯田 そうですね。バイトに行つて初めて敬語という言葉があるんだと知つたとしても、使い方がわからないので、見よう見まねで使うと「メニューをお下げてよろしかったでしょうか」とか、「コーヒーのほうをお持ちしました」なんて、赤ちゃんがお母さんの口まねをするのと同じように使つてしまふんです。そして、それが定着してしまつて、あとから気がついた人たちが「変な接客表現だ」と言う、何か悪循環になつているような気がします。

竜楽 その意味で落語がやっぱりすごいと思うのは、話の中に接客表現が入っていることです。
飯田 そうですね。



竜楽 言葉遣いに気を付けなさいというの、一応、乱暴者の八さんを必ず題材にしますし、接客表現といえど「権助、今の口の聞き方はなんだ。おはようございますと言ったら、はつきりおはようございますと返しなさい」とか。「寒いですわと言ったら「山は雪でございませう、ぐらい言いなさい」とね。昔は世間が鍛えてくれました。10歳ぐらいてもう社会に出されたわけですから、そこで無理やりに覚えさせられる。そうすると当然親から離れているわけです。外国だと子供のときからベツドルームは別というように、割と早く自立させますよね。日本ではそれを補っていたのが奉公だったのかも知れませぬね。

飯田 そうですね。

竜楽 最後にこれからおやりになりたいことをお聞かせください。

飯田 中大の授業が私はずごく楽しいし、やりがいを感じているので、よりよい授業をしていけるように頑張りたいと思っています。あと数え方の研究もまだ途中なんです。『数え方の辞典』は、途中報告みたいなかたちなので、この本を出版したあと全国からお便りをいただいたり、私のところはこう数えないとか、私の職業ではこう数えるという情報をたくさんお寄せいただきました。そこで、これを再編成して改訂版を例えば5年、10年の節目でやっていければいいかなと考えています。

竜楽 言葉というのはどんどん変わっていきますし、昔はこうだったのにはこう数えると。そういうことも何か載っていたと思いますけれども。

飯田 ええ。例えば1個という数え方も今すぐく使われています。学年が1個上とかね。あれもどこまで広がるのか少々興味ありますし、あと、やはり若い人に数え方とか日本語の美しさ、きちんと言葉を使うと

いうことが、いかに社会では強い武器になるかということをもっと知ってもらえるように、授業だけでなく学生に触れる機会があれば教えていきたいと思っています。

竜楽 言葉って、世の中を生き抜くための一番の武器ですものね。

飯田 そうですね。だから日本語がきちんとできなければ、いくら外国語を勉強しても、ある意味、金メッキみたいな感じになってしまうんです。敬語がきちんと使えない学生というのは、英語もいいかげんなんです。きちんと日本語が使える学生は英語もきちんとできるんです。だから言語全体に関する繊細さ、神経がどれぐらい行き届いているかということが、外国語の学習に大きく影響していると感じています。そういうことに早く気が付いて、英会話だけでなく、言葉全体に毛細血管が行き渡るような感じで勉強して欲しいと思います。

今回の対談は勉強になりました。改めて考えると数え方って難しいですね。

先日こんな事がありました。

地方での落語会。大きなお寺が会場です。

「それでは竜楽師匠に落語を一曲お願いします。」

「あー、落語は一席なんですすが。」

「すみませんね。ここはお寺ですから畳敷きなんですよ。おせらく、イス席と一席を聞き違えたのでしょう。」

気をとりなおして高座に向かうとマイクの前に座ぶとんが山のように積んである。場所がお寺だけにハッキリ言ってやりましたよ。

「ナンマイダー。」

